

書評論文

## 実体主義の新たな視点 — 加地大介『もの：現代の実体主義の存在論』を読む —

秋葉剛史

### Abstract

This is a review essay on Daisuke Kachi's *Agents: Contemporary Substance Ontology* (sic. Shunjusha, 2018). The book develops and partially defends an ontology that takes the category of substance as the most fundamental one. The author provides in it a new perspective on substance, which consists in characterizing substances as bearers of what he calls "substance modalities" (of which there are four kinds, that stem from the factors of essence, power, past persistence, and future persistence respectively). The first part of this review essay gives an extended overview of Kachi's book while the second discusses some problems it may face.

伝統的に「実体」と呼ばれてきた個別的で具体的な対象（馬や机や原子など）の身分をめぐっては、現代の形而上学でも議論が続いている。一つの方向性は、「実体」を独自の存在論的カテゴリーとして認めず、何か別のカテゴリーに還元可能なものとみなす路線だ。例えば、実体をトロープの束として分析する Simons 1994、事態の複合体とみなす Armstrong 1997、関係構造に基づく一種のパターンとして説明する Ladyman & Ross 2007 など、この路線を支持する論者は少なくない。だが一方、実体というカテゴリーを改めて基礎的なものとして承認し、それを中心に据えた形而上学を構築しようという動きも（特に 1990 年代以降）活発化している。こうした「現代の実体主義」は、多かれ少なかれ明示的に、実体主義形而上学の祖とも言えるアリストテレスの議論を参照しつつ、その遺産の継承とさらなる理論化・体系化を目指すという形で展開されている。

加地大介による『もの：現代の実体主義の存在論』（春秋社、2018年）は、この後者の見地から実体主義に新たな貢献をなそうとする意欲作だ。本

書(以下、加地の前述書をこう呼ぶ)は、一貫した実体主義者として形而上学業界ではよく知られる著者が、長年の研究成果をふまえ世に送り出したものである。その中では、現代の(アリストテレス主義的)実体主義の最新の動向を伝えつつ、著者独自の観点から実体主義の発想を深化・発展させることが目指されている。著者がそこで提示する見解に最終的に同意するか否かにかかわらず、本書が現代の実体主義の可能性について考える上で必読の書であることは間違いないだろう。

そのようなわけで本論文では、本書の内容を紹介した上で若干の批判的検討を行ってみたい。第1節(内容紹介編)では、本書の全体的な方針を確認した後、各章の内容を概観し、その意義について述べる。この箇所では分量の許す限りなるべく丁寧な紹介を心がけるので、本書の概要を知りたい方はここだけでも参考にしてもらえればと思う。第2節(批判的考察編)では、本書の議論に関して筆者が抱いた疑問や不満を五つほど挙げて論じる。なお以下では、丸括弧内のゴチック体数字により本書の頁番号を表すことにする。また本書で引用される著者以外の論者による表現も、著者自身の見解を代弁するものとして引用されていることが明らかな場合は地の文の表現と区別せずに引照する。

## 1. 内容紹介

### 1.1 全体の問いと答えの方針

本書の内容を概観するに当たっては、最初にその全体的方針を確認しておくのが有益だ。ひとことで言うと、本書の主要課題は「ものであるとはいかなることか」という問いに答えることである(3, 9)<sup>1</sup>。なかでも、生物個体や分子といった「典型的な実体」にまずは焦点を絞り、その正体を深く理解することが本書の目的だとされる(4f)<sup>2</sup>。実体の特徴づけというこの課題は伝統的なものだが、それに対する本書の答えはある独特の切り口から与えられる。すなわち本書で実体は、「実体様相」と呼ばれる数種の様相の担い手として特徴づけられるのである(5, 9, 263f)。著者によると、この実体様相とは「ものに由来する」(13)という性格をもった独特の形而上学的様相であり、後述するようにその中には四つの種類がある。言語表現上は、それらは様相を表すための現代の標準的な道具立てである文演算子によってではなく、コブラによって表現される「コブラ的様相」として性格づけられる。そして本書によると実体は、まさにこうした様相を「まといつつ存在する」(9, 14)ものとして特徴づけられるのである。

だがここで言う「コプラの様相」（としての実体様相）とはいったい何のことか。おそらく多くの読者にとって最もなじみ深いと思われる時間的なコプラの様相を例に説明しよう。背景となるのは、同一の実体に対して相容れない性質を帰属させる二つの言明、例えば「*a is red*」と「*a is green*」が、異なる時点ではともに真になりうる——つまり変化というものがありうる——ことをどう理解すべきか、という問題だ。この問題への答えとしては、「*a*」の表す対象を時点に相対化する道と、「*red*」などが表す性質を時点に相対化する道がまずはよく知られている（それぞれ四次元主義と三次元主義の標準解答）。だがこの二つに加え、「*a*」と「*red*」を結びつけるコプラ「*is*」を時点に相対化することで件の両立性を確保するという道もある（e.g. Johnston 1987）。これはつまり、対象が性質を例化する「仕方way」には様々な時間的様態があると考える道であり、これに従うと、例えば*a*は*redness*を《今日的に-例化する》が、*greenness*を《十日前的に-例化する》、といった主張が可能になる。そしていま問題の「コプラの様相」（この場合は時間的なそれ）とは、こうしたコプラの変様体によって表現され、対象が性質をもつ「仕方」の違いとして捉えられるような様相のことである。

本書ではこのようなコプラの様相（実体様相）として、いまみた時間的様相に属する「過去様相」と「未来様相」に、「本質様相」と「力能様相」を加えた四つが導入される。その詳細は後に回すとして、ここで重要なのは、これらの様相はいずれも、実体を実体たらしめる四つの主要な「要因」に各々の「源泉」をもつもの（67f, 259）、あるいは、実体の基本的な「存在形式」（59）を反映したものとして位置づけられることだ。すなわち本書によると、実体は《本質》という要因を含んだものとしてある属性をある仕方でもち、《過去の持続》という要因を含んだものとして他の属性を他の仕方でもち、等々のことが成り立つわけである。だがもしこれらの様相（属性をもつ仕方）が、実際に実体の主要な存在形式を反映しているとすれば、実体というものの正体はまさにこれらの様相に関する考察を深めていくことで明らかにできるはずだ。本書で行われるのは、こうした見通しの下で展開される実体の「様相的特徴づけ」である。

## 1.2 各章の内容

以上の全体方針を念頭におきつつ、各章の内容をより具体的にみていこう。本書の本体部分は（総括と展望を行う第6章を別とすれば）、第1-2章からなる前半部と、第3-5章からなる後半部に大きく分けられる。前半部では、本書における実体の特徴づけの要である「実体様相」の概要が示さ

れ、後半部ではその源泉と考えられる「本質」「力能」「(過去と未来の) 持続」の各々について解明が試みられる。

第1章では、まず上述の意味での実体様相(コプラの様相)が、一般に「形而上学的様相」と呼ばれる種々の様相全体の中でどのような位置を占めるかが説明される(9-15)<sup>3</sup>。そして、このような(コプラの様相としての)実体様相の存在を認める本書の立場は、たしかに様相論理を背景とする現代の様相論においては少数派であるものの、少し視野を広げれば決して孤立無援のものではないことが確認される。具体的には、哲学史の中では、アリストテレス、アクィナス、ミル、パースといった哲学者がコプラの様相について肯定的に論じており(15-20)、様相論理が席卷した現代でも、フォン・ウリクト、マッギン、ジョンストン、ガルトン、ロウ、ヴェターらが同様の方向性を追求していることが示される(20-41)。

第2章では、いま導入した「コプラの様相としての実体様相」というアイデアをさらに明確化することが目指される。この明確化が必要なわけは次のように理解できる。たとえ前章で与えたような考察により、上の意味での実体様相が存在するという点はひとまず認められたとしても<sup>4</sup>、現代の我々が「様相」として通常思い浮かべるのは様相論理の文演算子により表現される「事実様相」(ないし言語に定位して言えば「文的様相」)であるという点に変わりはない。しかもそうした様相の中には、実体様相と一見紛らわしい「*de re* (ものについての) 様相」と呼ばれるものもある。では、本書でいう実体様相(コプラの様相)はこうした事実様相(文的様相)と正確に言っただけのように関係するのだろうか。

これに対する本書の答えは、実体様相と事実様相の間には一方が他方に還元されるという関係は(どちらの方向でも)成り立たず、両者は非還元的に関係づけられる、という「いわば穩健な」(62)ものだ。そうすると問題はその「非還元的関係」の内実だが、著者によると各種の実体様相は、それぞれ特定の種類の事実様相(特に対象固定的なそれ)の「根拠」になるという仕方ですべてと関係する。この関係は、例えば次のような形の公理によって表される<sup>5</sup>：

- (1)  $\alpha /_{\mathbf{E}} a \rightarrow \square (\alpha /_{\mathbf{E}} a)$
- (2)  $J\text{-pot-}a \rightarrow \diamond (J\text{-occ-}a)$
- (3a)  $K\text{-ret-}a \leftrightarrow P^*(K\text{-cur-}a)$
- (3b)  $K\text{-pro-}a \rightarrow F^*(K\text{-cur-}a)$

以上はすべて公理図式で、「a」は個体定項により、「 $\alpha$ 」「J」「K」はそれぞれ

れ適切な種類の述語により置き換えられるべき図式文字だ<sup>6</sup>。そして個体定項と述語を結合している「/<sub>E</sub>」「-pot-」「-ret-」などの表現が様相コプラである<sup>7</sup>。これらの命題（図式）においては、前件が文演算子なしの原始文<sup>8</sup>——実体様相を表す——である一方、後件は文演算子付きの様相文——事実様相（の一種である対象固定的な疑似的*de re*様相）を表す——になっている。実体様相は、このように事実様相の十分条件（(3a)の場合は必要十分条件）になるという仕方ですそれを「根拠」づけるとされるわけだ。

ただしそれぞれの実体様相は、やみくもに事実様相の十分条件になるのではなく、各々の「源泉」に即した形で、異なる様相論理体系で表される事実様相を根拠づけるとされる(67)。具体的には、(1)に現れる「□」はS5、(2)に現れる「◇」はT、(3a)に現れる「P\*」はS4、(3b)に現れる「F\*」はS4.3、にそれぞれ従う文演算子である。つまり実体様相による事実様相の根拠づけには、その源泉に応じた特定の論理体系の指定も含まれているわけである。

しかし、それぞれの実体様相の「源泉」とされる実体の各要因——本質、力能、(過去と未来の)持続——はより具体的にどう理解されるべきか。また、各種の実体様相によって根拠づけられる事実様相の論理が、それぞれ上述した体系のものになるのはなぜか。これらの問いに対しては、第2章の残り部分(68-87)での準備的考察をささみ、後半部の三つの章で回答が探られる。

第3章では、実体様相の一つ目の源泉としての《本質》が主題的に考察される。ここで中心となる問いは、i) 実体の本質というものをどのように理解すべきか、ii) (そう理解された) 本質に関わる実体様相はなぜS5の事実様相の根拠になるのか、の二つである。

このうち問いi) に関しては、まず「本質」の概念に一定の役割を与える三つの立場、すなわち、必然性本質主義、質料形相的本質主義、定義的本質主義の三つが「現代的本質主義」として紹介される(92ff)<sup>9</sup>。そして最後の定義的本質主義(ファインおよびロウに代表される立場)が、最も大きな一般性、妥当性、応用性をもったものとして支持される(102, 107)。この立場によれば、ある対象の本質とはその実在的定義、つまりそれが「何であるか」の答えとなるものであり、その内容は当の対象が属する類種の系列を重層的に含み、最上類としてのカテゴリーを中核とする(69, 100f, 136-9)。著者によると、この定義的本質主義を他の二つの立場より支持すべき理由は次のようなものである。まず必然性本質主義の方は、(ファインらの議論が示すように) 定義的本質主義からの一種の「帰結」とみなすことができる

(102f, 129ff). また質料形相の本質主義の方は、定義的本質主義が特に物的実体に適用された場合の「局所的適用」(102)とみなしうる. というのも、一般に実体の定義的本質とは、あるものの個性・自己統一性を(他の個体に拠らずして)成立させるものだが(107, 230), 当の実体が特に「物的」である場合、その個性・自己統一性は時間と空間の中で実現される必要があり(124f), その時間空間的な統一性を成り立たせる契機——ここではロウとクーンズの考察をふまえ「力能的統一性を伴う空間的延長」(125)と解釈される——は、実体の実在的定義によって要求される「質料的側面」として理解できるからである(107, 127).

また上記の問いii)に関しては、ここまでの議論をふまえて次のような答えが与えられる. 実体の「本質」が一種の定義である以上、本質様相から帰結する必然性は「広い意味での論理的必然性」とも言うべききわめて強力な必然性であることになる. そしてそのような強力な必然性を表現する体系としては、任意の可能世界における必然性がそのまますべての可能世界における必然性となるS5が相応しい(138-41). (またここでは割愛するが、この直前の箇所(130-8)では本質様相とそれに伴う必然性命題の「アプリオリ性」がなぜ成り立つかという点も説明されている.)

第4章では、実体様相の二つ目の源泉としての《力能》が主題的に考察される. 中心となる問いは再び、i) 力能はどのようなものとして理解されるべきか、ii) (そう理解された) 力能に関わる実体様相はなぜTの事実様相の根拠になるのか、の二つだ.

まず問いi)については、力能(および傾向性<sup>10</sup>)に関する「標準理論」と呼ばれる立場が主な対抗馬として取り上げられる. この立場は、力能を「刺激」と「発現」の間の反実条件法的な結びつきとして理解する. 例えば、対象aが《壊れやすさ》をもつとは、aがあるタイプの刺激(e.g. 床に落とされること)に晒されたならばあるタイプの発現(i.e. 壊れること)が生じるだろうということに他ならない、という具合である. これはたしかに力能に関する標準的な見方と言えるが、本書ではいくつかの理由から(147, 156), それに替えてロウやヴェターらの提唱する「代替概念」が支持される. この立場によると、力能は発現のみによって個別化され、その様相的本性は必然性よりも可能性に近い「潜在性」である(157, 184). よって例えば、aが《壊れやすさ》をもつとは、aがある(文脈に応じた)閾値以上の程度において壊れることへと向かう潜在性をもつことに他ならない、ということになる(75, 79).

またこの結論に至る過程で、関連する二つの論点が考察される. 一つは、

いまふれた潜在性の概念によって形而上学的様相全般を還元しようというヴェターの試みだ(155-72)。これに対する著者の態度はおおむね否定的で、そのような還元は不可能であり(172)、潜在性はあくまで一つの種類の形而上学的様相の供給源として捉えるべきだと論じられる(165ff)。もう一つは、上述した力能の代替概念の背景としてロウがとっていたとされる、因果に関する「things-processモデル」という見方だ(152ff)。このモデルは、力能の標準理論の方と自然に結びつく因果の「two-eventモデル」と異なり、因果を「実体的対象とプロセス」間の関係として捉える。そして著者はこの点でも、ロウの示した方向性を支持し、それが(非標準的ではあるものの)決して孤立したものではないことを示そうとする(155, 173-84)。

上記の問いii)については、ここまでの議論に基づき次のように論じられる。力能様相から第一次的に帰結する文的様相は可能性だが、この可能性は(単に論理的に排除されてはいないという意味での)薄い可能性ではなく、現実性に準ずるようなきわめて強力な可能性(「客観的可能性」とも呼べるもの)である。するとその裏返しとして、これに基づいて規定される必然性のごく弱い意味でのそれになり、そうした弱い必然性を表現する様相体系としては、S5の対極に位置するようなきわめて原始的な体系であるTが適切である(187f, 192f)。

第5章では、実体様相の三つ目と四つ目の源泉としての《過去持続(これまでの持続)》および《未来持続(これからの持続)》の解明が図られる。中心となる問いはここでも、i) これらの持続はどのように理解されるべきか、ii) (そう理解された) 持続に由来する実体様相はなぜS4およびS4.3の事実様相の根拠になるのか、である。

問いi)に関しては、まず実体の持続を(四次元主義者のいう「延続」ではなく)あくまで「耐続」として捉えるという方針が確認され(82ff, 197f)、この耐続が、「複数の瞬時的世界すなわち「時点」において貫時的同一性を保ちつつ個体として存在すること」(201)として定義される。この定義に登場する「時点」ないし「瞬時的世界」は、ある種の現在主義を採用した上で、「継起的に生成してはたちまち消滅していくような世界」(204)として特徴づけられる。また、同じく定義に登場していた「貫時的同一性」の方は、R・テイラーの「純粹生成」の概念を援用しつつ「形而上学的な意味において歳を取る」(207)こととして説明される。

続いて、こうした実体の持続を記述するための適切な論理体系はどのようなものか、という点が考察される(217-28)。特に比較対象になるのは、(ここでの議論の着想源である)時制と時相に関するガルトンの理論だ。彼の理

論がもつばら「できごと」を記述するものと想定されていたのに対し、著者はむしろ「プロセス」こそが実体的対象の持続様相が浮かび上がってくる重要な要因であるとする(223)。そして結果として、「プロセス論理」と呼ばれる形式——プロセス述語と個体定項が時相コプラにより結合されてできる命題の論理的ふるまいを記述するもの——が支持される。

問いii)に関しては、次のように論じられる。まず、「これまでの持続」に由来する過去様相は(確定済みで覆せない事柄を表す)きわめて強力な必然性の一種と考えられるため、それに相応しい論理体系は、S5から到達可能性関係の対称性を保証する公理だけを除いたS4となる(232f)。一方、「これからの持続」に由来する未来様相は(まだ成否の確定していない事柄を表す)可能性の一種と考えられるため、S4に到達可能性関係の稠密な直線性を保証する公理を加えたS4.3が相応しい(235ff)。

最後の第6章では、本書における実体の特徴づけの要となった実体様相の全体像が改めて示され、いくつかの補足事項と今後の課題が述べられる(253-9)。また、実体様相の諸源泉の間には相互依存的な連関があることが強調される。すなわちそれらの間には、実体の存在に不可欠な定義的本質においては力能が中心的位置を占め、その力能は持続(耐続)する対象の存在を要請し、さらにその持続は本質を要請する、という絡み合いがあるとされる(259-63)。

以上の本論に続く二つの試論(分量的には275-333とかなり多い)では、本書で描き出された(どちらかと言えば伝統的で常識的な)実体像が、現代物理学の成果とどの程度調和するのかが検討される。試論Aでは量子論、試論Bでは相対性理論が取り上げられ、本書の実体像はどちらの理論とも少なくとも両立可能であることが論じられる。

### 1.3 本書の意義について

さて以上のような内容を含む本書については、様々な肯定的意義を指摘できるように思う。一つの意義としては(著者もふれているように)、近年の海外の研究動向、特に実体主義に関するその紹介と解説という点を挙げられるが(8)、本書の意義はもちろんそれには尽きない。

まず総論的な観点から言うと、とりわけ目を引くのは、本書を導く全体的着想それ自体の獨創性だ。「実体とは何か」に関する従来の議論のほとんどは、いくつかの個別の特徴(e.g. 独立性、個別性、時空性など)をリストアップし組み合わせるといった形のものであり、「実体様相」という統一的な観点からこの問いに答える本書のような試みは(筆者の知る限り)国内外を

問わずほぼ前例がない。この点において本書は、実体をめぐる議論にいわば新たな次元を開くものだと言うことができよう<sup>11</sup>。また「実体様相」の観点を中心に据えることで、ロウの種論理、ヴェターの潜在性理論、ガルトンの時相演算子理論というそれぞれ別個の文脈で提案されてきた諸理論を統合的に考察できることを示した点も、本書の独創的な総合として評価されるべきだと思われる（私見では、著者はこの点をもっと強調してよかった）。

また本書には、各論としても興味ぶかい内容が豊富に含まれている。なかでも、質料形相論と定義的本質主義の関係をめぐる第3章の議論、非還元的様相実在論に関する（主に第4章の）議論、時相・時制論理の適切な形式に関する第5章の議論などは、個別にみても固有の価値をもつと思われる。さらに、本書の要である実体様相の概念に公理的な定式化を与えたことも、今後の発展性を期待できる貴重な貢献だろう。

## 2. 批判的考察

しかしそうは言っても、本書の議論に関して疑問点や不満点がないわけではない。本節ではそうした点を五つほど挙げ論じてみたい。ただし、あいにく論理学や物理学の話題は筆者には荷が重いので、以下では主に（狭義の）形而上学に関わる諸点について論じる<sup>12</sup>。

### 2.1 議論方法について

批判的考察の一つ目は、本書の内容というよりも形式（論じ方）に関するものだ。それを述べるため、まずは本書の大枠のねらいを改めて確認しよう。

上述のように、本書の中心となるのは「もの（実体）であるとはいかなることか」という問いである。そして本書では、この問いへの答えを探る中で、実体およびその要因などに関して様々な主張がなされる。例えば（大雑把な定式化では）、実体は本質・力能・持続という要因を含む、実体の本質とはその実在的定義である、力能は発現のみによって個別化される、等々の主張である。いま便宜のため、本書で採用されるこれらの主張——全体として実体の特徴づけに結びつくと想定される——の集合を「 $T$ 」と呼ぶことにしよう。この $T$ に関して重要なのは、それが実体主義の理論として提示されていることだ。つまり $T$ に含まれる各々の主張は、実体を「存在論的に最も主要な基礎的カテゴリーとして位置づける」(5)という実体主義のポリシーを展開したもの（少なくとももそれと整合するもの）として意図されている。

ではこの実体主義の理論 $T$ は、どのようなねらいをもって提示されているのか。著者自身明言しているように、それは「概念分析」のためではない

(6). つまり  $T$  を提示することで本書が目指しているのは、我々の日常的概念の内容を忠実に再現・要約するといったことではない。むしろ本書が意図しているのは、個体・因果・時間といった「实在の主要な要因と考えられる […] 側面の解明に寄与することによって、实在の本性に迫りうるような形而上学的理論を構築すること」(6) である。つまり  $T$  は、実在世界の基本的なあり方を優れた仕方で解明するための理論として意図されている。そしてそのような  $T$  を、実体主義を出発点として実際に成功裡に構築できることを示すことにより、いわば遡及的に実体主義を擁護することが本書の大きなねらいだと言える。

以上をふまえると、本書で提示される  $T$  が満たすべき要件として、次の二つを取り出すことができる。第一に、 $T$  は最低限、実体主義の発想を首尾一貫した仕方で展開したものでなければならない。つまり  $T$  に含まれる各々の主張は、実体主義の基本ポリシーと合致し、また互いに整合的なものでなければならない(ねらいは実体主義の擁護なので)。しかしそれだけでなく、第二に  $T$  は、より積極的な利点や魅力をもった理論である必要がある。すなわち  $T$  は、実体主義者であろうとなかろうと、個体や因果や時間などの解明に取り組む者なら(おおむね)共通に受け入れるような何らかの中立的な美德——既存の問題の解決能力、経済性、包括性、広く共有された直観との一致、等——を備えることで、当該の主題に関する他の理論より優れていると言えるようなものでなければならない(ねらいは実体主義の擁護なので)。

本書の各箇所における議論( $T$  にどの主張を含めどの主張を含めないかの選択)は、基本的にこの二つの要件のどちらかを意識したものとして解釈できるが、実のところ本書では、これらの要件はそれとして明示されておらず、各箇所ですのどちらが意識されているのかも必ずしも明確でない<sup>13</sup>。これが本書の論じ方に関して筆者が不満に感じる点だ。もちろん著者本人にとっては、自身の議論の意図はわかり切っていて記すまでもなかったかもしれないが、この点はやはり明示的であってほしかったと思う。というのも、ある議論(立場選択)が二つの要件のどちらを意識したものであるかによって、その議論の性格はずいぶん変わってくるからだ。一方で、第一の要件をもつば意識した議論はいわば「構築」段階のものであり、そこで目指されるのは、実体主義の発想をまずは真偽の評価が可能な具体的主張へと展開・分節化することである。それゆえこの段階では、著者は、実体主義の基本ポリシーと合致した内的整合性を損ねない範囲で、自身の採りたい見解をある程度自由に採用する(ひとまずテーブルに乗せる)ことができる。他方、第二の要件を意識した議論は「正当化」段階のものだ。つまりここでは、何

らかの中立的な理由に基づき、自身の採ろうとする見解が他のものより採用に値することを示すということが求められる。このような議論の性格の違いをはっきりさせることは、本書で採用されている各見解がそれぞれどのようなものとして採用されているのか——著者の直観などを反映した当座の見解としてなのか、中立的・理論的理由によって支持された見解としてなのか——を明示することでもある。そしてそれを明示することは、実体主義の擁護という大目標に向けて本書が何をどこまで達成したのかを明確にするためにも重要だったのではないだろうか<sup>14</sup>。

## 2.2 本質が含む内容について

形式面の不満はこのくらいにして、ここからはより実質的・内容的な疑問を提起しよう。その一つ目は、実体の「本質」が含む内容に関する本書の見解にはある種の緊張関係がみられるのではないかと、いうものだ。（これは前述した第一の要件、特に*T*の内的整合性に関わる問題提起である。）

上でみたように、実体の（実在的定義としての）本質は、それが属する類種の重層的な内容を含み、その中核は最上類としてのカテゴリーだとされていた(137)。よって一見すると、例えば一頭の馬の本質には、アラブ種、ウマ、奇蹄目、有蹄類、哺乳類、脊椎動物等であることが含まれる、と考えてよいように見える。しかし実際には、本質の内容は本書においてこれよりかなり希薄なものとされている。というのも、「本質とは実体的対象の個性・単一性を成立させるような何か」(136)であり、「類種のレベルの中には少なくともこのような〔個性の成立の前提となるという〕意味で本質とは言えないようなレベルも存在しうる」(137)からである。例えば、「水分子であるかアンモニア分子であるかとか、馬であるか牛であるかというレベルでの相違は〔…〕本書で規定されるような意味での本質の一部とは言えない」(137f)とされる(142も参照)。

こうした立場が本書でとられる理由は、一方でよく理解できる。というのも著者は、本質（とそれに伴う必然性）はア priori に把握可能なものだという近年のアリストテレス主義者の見解に同意しているからである(91, 136f)。この見解をとる以上、経験的探究によってはじめて明らかになるような内容——ある実体がどの自然種に属するかに関する情報はその一例だと思われる——を本質の一部に含めることはたしかにできないだろう。

しかし本質から自然種レベルの内容を除くことは、他の箇所での叙述とはあまり折り合いがよくないように見える<sup>15</sup>。というのも、（本質とは「何であるか」という問いへの答えだという主張を素直にとればそこに自然種レベ

ルの内容を含める方がむしろ自然に見えるのに加え、)本書において本質には、少なくとも二つの実質的な役割が与えられているからだ。その二つとは、一定の種類の方能有を基礎づけ・要請すること(117ff, 127, 263)、また、実体の実在性基準を与えること(132ff, 261f)である。これらの役割を実質的な仕方ですたしうるためには、本質はかなり豊かな内容を含まねばならないと思われる。例えば、《牧草を消化できる》や《銅分子とイオン結合できる》といった方能有を要請できるためには、本質は単に《生物個体である》や《分子である》といったレベルの内容を含むだけでは不十分だろう。同様に、《二個の銅原子を含む》ことをその一部とするような実在性基準を与えるられるためにも、本質は相応に下位の種の内容を含まねばならないだろう。このように、本質がどの程度の内容を含むかについての本書の叙述は、一定の緊張をはらんでいるように見える。

もし「本質のアプリオリな把握可能性」と「本質の二つ(かそれ以上)の実質的役割」が実際に二者択一の関係にあるとしたら、筆者としては後者を保持することを勧める。本書でも述べられるように、そもそも本質とは、その実在性を認めることが「实在論の主張そのものであるか、ひょっとすると、实在論全般の「根拠」となりうるような」(98)何かだと思われる。だとすれば本質は、《私たちの精神から独立にそれ自体で確定した实在世界》という観念を前提に、あくまでそのような精神独立的世界を構造化している契機として認められるべきだろう。そしてそのようなものとしての本質に、アプリオリな把握可能性という認識的制約を課すことは、よほど強力な理由がない限り正当化が難しいように思われる。(103や136fでふれられる様相認識論上の論点は場合によるとそうした理由になるかもしれないが、いずれにせよさらなる議論の展開が必要だろう。)

### 2.3 方能有と実体の関係について

内容的な疑問の二つ目は、実体と方能有の関係をめぐるものだ。ここで提起したいのは、この両者の関係に関する本書の見解が直面するかもしれない一つの困難である。(この論点は、以下の§2.4と§2.5で挙げる論点と同様、前述した第二の要件、すなわちTに含まれる主張の理論的正当性に関わる。)

まず、実体と方能有が本書でどう関係づけられていたかを確認しよう。第3章において実体は、何らかの意味で方能有を含む「方能有的統一性」(127)だとされていた。より詳しく述べるなら、実体は、実在的定義としての「形相」が時間空間内で「質料化enmatter」(123)されることで具体的实在に至るも

のであり、この質料化は、(不完全な素材や裸の個体などではなく)「力能的外延」(124f)と呼ばれるものを契機としてなされる、というのが本書の立場である。ここで「力能的外延」とは、ある力能を内在させ、それに境界づけられたものとしての空間領域のことであり、これはさらに、当の領域に局在化している限りでの力能のこととして理解できるから、要は力能のトークン(トロープ)のことだと考えてよいだろう(cf. 246)。よって実体は、こうした力能トークンを構成要素として含む統一体だということになる<sup>16</sup>。

しかしこの両者の間の「構成要素」関係は、より正確にはどう理解されるべきか。一つのありうる見方は、力能トークンを実体の独立的な構成要素として捉えるものだろう。すなわち、力能トークンは実体に先立って存在可能なものであり、実体はそれらが一定の関係に立つことではじめて存在に至る、という見方である。だがこうした「ボトムアップ」的な見方は本書が支持するものではなく(105)、それが支持されない理由も推測がつく。なぜならこの見方下では、実体は力能トークンに対して派生的なもの、それに依存したものであることになり、これは実体を最も基礎的なカテゴリーとする実体主義の方針に反すると思われるからだ。むしろ本書が支持するのは、力能をあくまで実体のあり方の一部として、それに依存したものとして捉える見方である(105, 184)。この見方——全体(実体)が部分(力能)に先行するという「トップダウン」的ないし「全体論的」(105f)見方——は、おそらく「本質」の概念を介して次のように展開できるだろう。ある実体aが、力能トークンp1, p2, ...を含んでいるとしよう。いま問題の見方に従えば、〈p1, p2, ...の实在〉はまさに〈aの实在〉によって根拠づけられたものとして理解できる。なぜなら、aは(実体である以上)本質的にある特定の種Φの個別例であり、それゆえ〈aの实在〉は〈Φの個別例の实在〉を含んでいることになるが、一般に種は一定範囲の力能を「要請」することをふまえれば、〈p1, p2, ...の实在〉は、まさに問題の種Φがそれらのタイプの力能を要請するような種であったことの帰結として捉えられるからである。

だがこのような見方は(たしかに実体主義の要求には適うかもしれないが)、次のような疑問を生じさせる。この見方によれば、各々の力能トークンは「それが特徴づけるところの何ものか〔=実体〕の存在を前提として初めて意味を持つ」(105)のだから、それが属する実体が消滅した場合すべて一緒に消滅しなければならないはずである。しかし一見したところ、ある実体が消滅した後でもその力能の一部が残存している、とみえるケースは珍しくない<sup>17</sup>。つまり上の図式的な例で言えば、実体aが消滅した後でも、aに含まれていた力能トークンの一部——「p1」としよう——は残存しているよう

にみえるケースだ。こうした場合にも上の見方を貫こうとするなら、aの消滅後に存在しているのは実はp1とまったく同じタイプだが数的には異なるp1\*だ、と言う必要が出てくるだろう（p1自体はaと一緒に消滅しているので）。このp1\*については、aが存在していた期間中からp1と重なり合って存在していたと考えるか、aが消滅した瞬間にp1と入れ替わりで突如存在し始めたと考えるか、という二つの選択肢があるが、どちらも魅力的とは言い難い<sup>18</sup>。もちろんこの魅力的でない二者択一は、力能トークンが実体に依存していることを否定すれば避けられるが、それは本書が退けたかったはずの見方に戻るのだ。つまりここで著者は、少々難しい選択を迫られるようにみえる。

## 2.4 力能および因果に関する代替理論について

続いての疑問は、第4章で支持される、力能および因果に関する「代替理論」についてのものである。同章では、これらの代替理論をとるロウが「力能実在論者の進むべき方向性を示した」（149）とされているが、これは本当だろうか。少なくとも筆者は、力能実在論には共感するがロウの方向性をとる必要は感じない。以下その理由を説明しよう。

前述のように力能の標準理論によると、ある実体がある力能をもつとは、その実体が一定の「刺激」に晒されたならば一定の「発現」が生じるだろう、という反実条件法が成り立つことに他ならない。よってこの理論では、a) 力能は刺激と発現のペアによって個別化される、b) 力能の様相的本性は（条件的）必然性である、という二つのことが主張される。これに対し、本書が支持する力能の「代替理論」（ロウおよびヴェターの立場）は、a\*) 力能は発現のみによって個別化される、b\*) 力能の様相的本性は（条件的）必然性でなく可能性である、という二つを主張する（157）。

ではなぜ後者を支持すべきなのか。本書では、標準理論よりも代替理論の方がうまく説明や解釈ができるようにみえるポイントとして様々なものが挙げられている。すなわち、i) 自発的・ランダムに発揮される力能のケース（147）、ii) 何の条件もなしに常時発揮される法則的力能のケース（75, 147, 156）、iii) 比較可能性および文脈依存性という力能の特徴（156）、iv) 確定可能determinableな力能に基礎性を付与するような自然な力能実在論（156）、v) 力能が発揮されているが表面に現れる変化が伴わないケース（176f）、vi) 力能の実効性と実体の活動性（77）、といったポイントである。

だが実際は、これらのポイントはどれも、力能の標準理論の枠内で十分に説明や解釈ができるように思われる。次の二点に注意しよう。第一に、標準

理論の支持者はたしかに力能を反実条件法の形式で理解しようとするが、必ずしもそれを端的な条件法(AならばBだろう)で捉えようとはしない。むしろ多くの場合、力能は前件にさらに条件の加わった「条件つき力能 conditional power」(AかつA'かつ…ならばBだろう)として捉えられる(Shoemaker 1980)。第二に、通常力能は(たいていは単純化のため)決定論的なものとして論じられるが、原理的には、確率的な力能を排除すべき理由はないと思われる(Bird 2007: 124f)。よって一般的には、力能は「AかつA'かつ…ならば、 $p$ の確率でBだろう」という形式で表せることになる(決定論的力能は $p=1$ となる特殊ケース)。こうした一般化は前述のa)とb)に若干の修正を要求するが、標準理論の枠組みを逸脱するものではないだろう。そしてこのような力能理解を基にすれば、前段落で挙げられたポイントには基本的にすべて応じられると思われる。例えば、i)のケースは時間経過を条件とした確率的発現と考えることで、ii)のケースは実際には真に無条件の発現ではないことを指摘することで、それぞれ応じられるだろう<sup>19</sup>。

また代替理論には、一見もつもらしくない面もある。力能(タイプ)は発現のみによって個別化されるという主張a\*)に注目しよう。これに従うと、例えば『平家物語』を語んじられる人と本を見れば朗読できる人がもつ力能は(発現の点では同じなので)単に程度が違うだけの同じ力能ということになるはずだが、これは正しいだろうか。また、摂取者を死に至らせる青酸カリ水溶液の力能と、青酸カリを溶かせば摂取者を死に至らせる純水の力能も、単に程度差があるだけの同じ力能だと考えるべきだろうか。否定的な答えには控えめに言っても十分動機があると思われ、だとすればこうした例は、力能の個別化要因に「刺激」も含める標準理論に有利な材料になる。

さらに本書では、力能の標準理論と自然に結びつく因果論に対しても代替案が提示されている。この代替案を動機づけるのは、(本書では必ずしも明示的でないがおそらく)次のような考察だ。力能を「刺激」と「発現」の間の反実条件法的な結びつきとして捉える標準理論の下では、因果関係の方も、何らかの力能の「刺激」と「発現」の間に成り立つような関係として考えるのが自然だろう。これは因果関係を、刺激(原因)と発現(結果)という二つのできごとを項とする関係として捉える、因果の「two-eventモデル」だ(146)。しかし実のところ、このモデルは因果の最も重要な部分を取り逃してしまう。というのも、two-eventモデルが「原因」として認定する刺激は、実際は単にそれを機に生じる因果的プロセスの出発点ないしきっかけ trigger にすぎず、それが「結果」として認定する発現も、単にそのプロセスの終着点にすぎないからである(153)。つまりtwo-eventモデルでは、実体

の力能が徐々に発揮されることでもたらされる因果的貢献が、他の諸実体による貢献と総合されて全体的な変化が生み出される、という因果のいわば実質部分が捉えられていない(178, 181)。こうした実質を捉えるには、因果の「things-processモデル」への変換が必要だ。すなわち、因果を「原因としての実体とその因果的力能を行使・発現するプロセスによってその力能の受容者が変化するプロセスを〔…〕結果としてもたらす」(152. 強調引用者)という関係として捉えるモデルである。

しかし、因果においては実体の力能とそこから生じるプロセスが重要であるという(それ自体ごく真っ当にみえる)点は、何も因果関係の項を「実体-プロセス」としなくても十分認められるだろう。できごと因果論の枠内でそれをするには、単純に、ある種の因果関係は他のより基礎的な諸々の因果関係に依存していること、つまり、それらによって媒介されたり構成されたりしていることを認めればよい(cf. Bird 2010: 161)。例えば、ドミノ列の《1個目が倒れたこと》がその《100個目が倒れたこと》の原因であるとか、《私が外の降雨の様子を見たこと》が《私が部屋に留まったこと》の原因であるとかいった主張を考えよう。できごと因果論の支持者は、このような変化の記述があくまで「肌理の粗い略書き」(181)にすぎず、その出発点から終着点への推移が実際にはより基礎的な諸々のできごとの系列(プロセス)によって媒介・構成されていること、そして、それら諸々のできごとはそれぞれ何らかの実体の力能の発揮として起こることを、問題なく認められる。(実際バードは、本書で言及されるtwo-eventモデルの後に「many-eventモデル」と呼びうるものを提示してこの方向性により具体的な示唆を与えている(Bird 2010: 166)。)言い換えると、できごと因果論の支持者は、「変化するというできごとをその出発点と終着点だけで十分に特徴づけられると考えるヒュームと最近の論者」(178)が因果のすべてのレベルについて正しいと考える必要はなく、ある種の(というより実際は大部分の)変化はそれを生み出すより根底的なメカニズムをもち、そのメカニズムにおいては力能が本質的役割を果たすということ認められるのである。

## 2.5 現在主義をとる必要性について

最後の疑問は、第5章で支持される時間論上の立場に関するものだ。同章では、実体の「持続(耐続)」が、異なる時点に存在するものの間の数的同一性(貫時点的同一性)として定義された後、そこでいう「時点」の過去・現在・未来における存在性格(実在性)をどう考えるかが考察されている<sup>20</sup>。この点について本書が支持する立場は、まず、各瞬間では現在の時点のみが

存在すると主張する点で、永久主義——過去・現在・未来の時点は同等の実在性をもつと考える——とは異なる(204, 210f). だが同時にそれは、過去時点は未来時点にはないある種の実在性をもつと主張する点で、標準的な現在主義——過去と未来の時点は同等に非実在的だと考える——とも異なる(211f, 215). 要するに本書の立場は、現在時点にある種の特権性を認める点で「A論」の一種でありながら、過去と未来の非対称性を主張する点で標準的現在主義やスポットライト説とは区別される立場だと言える。

過去と未来の非対称性というこの主張は、本書における持続様相と時間様相の解明の柱となるものであり(228ff), 著者が是が非でも保持したいものだろう。だが周知のように、A論の枠内でこの非対称性を主張する立場には「成長ブロック説」もある。そして筆者の疑問は、本書の立場にとっては実はこの成長ブロック説をとる方が理にかなっているのではないかというものだ。

そう考える理由の一つは、本書の立場で過去の実在性を確保するにはかなり無理があるようにみえることである。著者によると、「過去時点の実在性は、形而上学的な意味での「年齢」を持っているところの実体的対象によって現在時点が構成されているということによって含意されるような実在性である」(211)。よって例えば、10年前の時点が(未来時点にはない)実在性をもつのは、10歳(以上)である何らかの実体的対象——例えば本書の著者——が現時点で存在するからである。だがこの考えに従うと、例えば90億年前の時点が実在的であるためにも、90億歳(以上)であるような何らかの実体が現時点で存在しなければならない。そのようなものが本当にあるのだろうか。本書で「実体」がかなり限られた種類の対象のみを指す(プロセスや堆積物などは含まれない)ことを考えると、その見通しは明るくないようにみえる<sup>21</sup>。また少なくとも、90億年以上の歴史をもつすべての可能世界でそのような「超高齢」実体が存在する必要はないだろう。これに対して成長ブロック説であれば、過去の時点が未来の時点にはない実在性をもつことは、前者の存在と後者の非存在という違いに訴えて単純に説明できる<sup>22</sup>。

また本書が採用している時間に関する他のテーゼも、ことさらに現在主義の採用を要求するものではないように思われる。具体的には、時間が非分岐的(直線的)であること(216, 237ff, 249), 現在が「生成した最新の時点」として過去にも未来にもない独特さをもつこと(202, 212, 249)は、成長ブロック説とも問題なく整合するだろう。

もし成長ブロック説ではまずい理由があるとするれば、それは実体の持続に関して本書が三次元(耐続)主義をとっていることかもしれない。実際著者

は、本書の立場が成長ブロック説と対立する点として、後者が「過去世界に関しては四次元主義を標榜する」(249)ことを挙げている。しかし成長ブロック説は、しばしばそのような立場として理解されるとはいえ、必ずしもそう理解される必要はない。というのも、三次元／四次元主義の対立はあくまで実体(物質的対象)の持続の仕方に関わるものである一方、時間論上の対立はできごとやプロセスといった(誰もが非耐続的対象とみなす)対象の実在性と非実在性に関わるものとして理解できるからだ。実際サイダー2007は、時間の永久主義を確立した後で三次元／四次元主義のどちらをとるべきかを論じているが、もしある時点の実在性を主張することが即座にその時点に関して四次元主義をとることを意味するとしたら、こうした論じ方は意味をなさないことになってしまう。よって成長ブロック説の本質は、あくまで過去時点のできごとに対し(A論の枠内で)現時点のそれと同等の実在性を認める点に求めることができ(実際例えばForbes 2016はそう定式化している)、この立場は実体の持続に関する三次元主義とも組み合わせ可能だと考えることができるだろう<sup>23</sup>。そしてこれが正しいとすれば、本書が現在主義にこだわるべき理由はまだ与えられていないことになる。

## おわりに

本論文では、加地大介による『もの』の紹介と批判的考察を行った。最後に結論的なことを言えば、筆者のみるところ本書は、実体を捉える新たな統一的視点の提供をはじめ多くの貴重な貢献を含んでいるが、実体主義の擁護という点ではいまだ多くの課題を残している。とりわけ、因果論や力能論において実体主義が何をもたらしてくれるのかは必ずしも明らかではないように思われる。もちろん、本書の議論が実体主義の擁護にとってはまだ道半ばであることは著者自身進んで認めることでもあるので(6, 361)、今後の著者(および他の実体主義者)による議論の展開を楽しみにしたい<sup>24</sup>。

## 注

1. これが主要課題であることは確かだが、本書はいわば裏テーマとして、形而上学的様相の解明(その全体像や構造、その中での実体様相の位置の明確化など)という課題にも取り組んでいる。実際、第1章と第6章それぞれの冒頭節をみる限り、本書の中心主題は形而上学的様相ではないかとさえ思えてくるし、その間には「非還元的・多元的様相実在論」(57, 64ff, 155-72, 184-6, 255f)という実質的な立場も提示されている。
2. 「典型的実体」には、しばしば例に挙がる生物個体や分子などのほか、曖昧な

- 境界をもつ対象や複合的人工物 (127) なども含まれるようである。
3. この第1章第1節は多くの読者をひるませるかもしれないが、最初に理解できずとも後で見返せばよいと開き直って先に進むことをお勧めする。
  4. この意味での実体様相が存在するという想定の正当化は、第1章での文献史的な考察に加え、その事実様相(文的様相)への還元に対抗する第2章の議論によっても与えられていると解釈できる。
  5. ここで挙げた (1) は本質, (2) は力能, (3a) と (3b) は過去持続と未来持続, の実体様相にそれぞれ対応する(直感的な読み方は以下の註7を参照)。なお本書では、ここでの (1) は [AE2], (2) は [AP+], (3a) は [AR2+], (3b) は [AF+], とそれぞれ呼ばれている。これらを含む公理の一覧は本書の付録(265-72)を参照のこと。
  6. 大まかには、「 $\alpha$ 」は類種を表す述語(70), 「 $J$ 」は潜在的と顕在的を区別できるようなプロセスや活動を表す述語(77), 「 $K$ 」はプロセスを表す述語(223), によりそれぞれ置き換えられる。
  7. 直感的には、「 $\alpha$  /  $\mathbf{a}$ 」は「 $a$ は本質的に種 $\alpha$ の個体例である」, 「 $J$ -pot- $a$ 」は「 $a$ はプロセス・活動 $J$ へと向かう(一定程度以上の)潜在性をもつ」, 「 $K$ -ret- $a$ 」は「 $a$ はプロセス $K$ に参加していた」, ということそれぞれ意味する。対応して、「-occ-」は顕在性, 「-cur-」は現行持続, 「-pro-」は未来持続, のそれぞれの相において個体が属性をもつ仕方を表す様相コブラである。また「 $P^*$ 」と「 $F^*$ 」はそれぞれ過去と未来の文演算子で、直感的な読み方は「 $\sim$ ということとは現時点ないし過去のある時点において真である」, 「 $\sim$ ということとは現時点ないし未来のある時点において真である」となる。
  8. 本書で「原始文」と呼ばれる文は、通常「原子文atomic sentence」と呼ばれるもの——論理結合子や量化表現を含まない単純な文——におおむね対応する。ただし「原子文」という語はふつう文相互の独立性を含意するのに対し、本書における原始文の間には形而上学的な関連性が成立することから、独立性の含意を避けるため「原始文」という表現を用いると説明されている(335 n.2)。
  9. 大まかには、必然性本質主義とは「 $X$ の本質= $X$ がすべての可能世界でもつ性質」とする立場で(93), 質料形相的本質主義とは「 $X$ の本質= $X$ の顕在性(形相)と潜在性(質料)の複合体」とする立場(94)。
  10. 本書で力能と傾向性は統一的に扱われるので、ここでも区別しないことにする。
  11. もちろん結果としては、本書の特徴づけは従来のリストアップ型のそれと重なる部分が大きいだろうが(263), それを導き出すための新たな視座を提示したことは本書の固有の貢献と言ってよいだろう。なおこの着想は、30年以上前の著者の修士論文にまで遡るものであるらしい(361)。
  12. 本論文では立ち入らないが、著者も挙げる「なぜ実体様相は四種類なのか」(59, 68ff)という点はさらに考えてみるべきものだと思う。同様に、本書

で採用される諸主張は実際の程度まで実体主義を必要とするのか(実体主義と整合的だとしても他の立場でもよい可能性はないのか)、また、実体を最も主要なカテゴリーと位置づけるとはそもそもどういう意味か(具体的に何をしたらそれをしたことになるのか)、といった点も筆者としては気になった。

13. そのようなわけであくまで筆者の解釈になるが、もっぱら第一の要件を意識したものとして読めるのは、現実性と現在性(57, 189ff)、実体の活動性(77)、物的実体の全体論(105)、物的実体の質料形相論的側面(124)、個性性の原理と同一性・実在性基準(132-6)、性質二元論(192)、耐続主義(82f, 126, 197ff)、現在主義(変遷的世界説)(202-16)、純粹生成の非分岐性(216, 240)、実体とプロセスの関係(224)、について論じられる箇所などである。一方で第二の要件を意識したものとして読めるのは、定義の本質主義を支持する箇所(102-7)、力能の代替理論を支持する箇所(147, 156ff)、形而上学的様相の潜在性への還元に対抗する箇所(155-72)などだ。
14. また議論の仕方についてもう一点付け加えれば、注力のバランスとして、第二の要件に関わる正当化段階の議論(自身の見解の支持理由の明確化やその吟味、ありうる反論の検討などの作業)はもっと念入りに、そしてより多くの見解に関して行ってほしかった。もちろん物事には順序があり、本書ではまず著者の抱く実在像を具体的に描き出す作業を優先的に行ったということだとは思いますが(cf. 6, 361)、少なくとも筆者には実体主義をとることの根本的な動機からしてあまり響いてこなかった。
15. 本質の希薄化という懸念には著者もふれているが(138)、そこでの回答は少なくともここで提起する問題への答えとしては十分でないと思われる。
16. 本書ではこうした力能のトロープに加え、時空的・構造的性質のトロープも認められている(192)。「力能の外延」はおそらくこれらも含んだものだと思う。
17. 例えば一頭の牛が死んだ後も、そこに残る物体を叩けばそれまでと同じ音がするだろうし、写真を撮れば同じ像が映るだろう。Cf. Denkel 1997.
18. もっとも後者については、トロープは随時生成しては消滅していく「継起的」対象(205f)だから問題ない、と応答されるかもしれない。しかし、トロープをそう捉えるのはあくまで一つの選択肢であり(cf. Ehring 2011; Chrudzimski 2006)、また、たとえ継起的対象だとしても依存先が突如として変わるのはいちいち奇妙だと思われる。
19. 残りについても見通しだけ言うと、iii)には本書でも言及されるマンリーとワサーマン自身による応答、iv)にはBird 2007: 21ffやGillett & Rives 2005の議論がある。v)は前件の複雑化からの当然の帰結だし、vi)については条件つき力能の帰属もあくまで単項的であることの指摘によって応えられるだろう。
20. ちなみに「時点」は、「いくつかの実体的対象に関して〈何らかの精神独立的な意味で同時に〉成立していると言える事柄の総体」(203)と定義されている。

21. さしあたり二つの応答が考えられるがどちらも容易な道ではない。一つは、宇宙全体を一つの実体と考える道だが、これは言うまでもなくかなり実質的なコミットメントだ。もう一つは、過去の実在性を単一の実体の年齢によってではなく複数の実体による「年齢継承」(例えば現在10歳の実体が誕生した時点である実体が50歳だったとすれば60年前の時点は実在的と言える等々)によって確保する道だ。しかしこれだと、少なくとも本文中で引用した説明は放棄されているし、またいかなる実体も存在しないような過去時点は存在しないという(もっともらしくないように思われる)帰結は依然として残る。
22. 一般に、過去命題の真理付与者 truthmaker を与えることは現在主義よりも成長ブロック説の方が無理なくできる。本書247頁では、「K-ret-a」と「L\* (K-ret-a)」と「P\* (K-cur-a)」の同値性に訴えて、aの消滅後でもaに関する過去命題が真になる仕組みが説明されているが、そこでのポイントはあくまで命題の真理性の保証であって真理付与者を与えることではない点に注意されたい。
23. 著者が挙げる成長ブロック説の「存在論的な不安定さ」(249)も、以上の理解によって解消するだろう。
24. 本論文の作成過程では二名の匿名査読者から多くの有益な指摘をいただいた。記して感謝する。

## 参考文献

- Armstrong, D.M. 1997. *A World of States of Affairs*. Cambridge UP.
- Bird, A. 2007. *Nature's Metaphysics*. Oxford UP.
- Bird, A. 2010. Causation and the Manifestation of Powers. In A. Marmorodo (ed.), *The Metaphysics of Powers*. Routledge: 160-8.
- Chrudzinski, A. 2008. Enduring States. In C. Kanzian (ed.), *Persistence*. Ontos: 19-31.
- Denkel, A. 1997. On the Comprehense of Tropes. *Philosophy and Phenomenological Research* 57: 599-606.
- Ehring, D. 2011. Tropes. Oxford UP.
- Forbes, G. 2016. The Growing Block's Past Problems. *Philosophical Studies* 173: 699-709
- Gillett, C., Rives, B. 2005. The Nonexistence of Determinables: Or, a World of Absolute Determinates as Default Hypothesis. *Noûs* 39: 483-504.
- Johnston, M. 1987. Is There a Problem About Persistence? *Proceedings of the Aristotelian Society*, Suppl. 61: 107-35.
- Ladyman, J., Ross, D. 2007. *Every Thing Must Go*. Oxford UP.
- Shoemaker, S. 1980. Causality and Properties. In P. van Inwagen (ed.), *Time and Cause*. D. Reidel: 109-35.
- Simons, P. 1994. Particulars in Particular Clothing: Three Trope Theories of Substance. *Philosophy and Phenomenological Research* 54: 553-75.

サイダー, T. 2007. 『四次元主義の哲学』, 中山康雄ほか訳, 春秋社.

(千葉大学)